環海異聞

十三

862
1
51

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

862-1
151

環海異聞巻之十二

本船出帆并帰朝洋中之記

六月十六日　暁日を海上諸事北風悪く波
て出帆せ計色海はてしなく日を走る宵の嵐
の星多く掬く成るの恒に氣なりき次第
沖へ出るの時の右北方の遠山雲霞の如く見ゆ
同十八日　夕ニツケとい国の海上を過くす山形ら

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』　請求記号 862-1
ガラス使用

全く海なりといふ
扨て此海和蘭にいふオランストーセイ海と
なり濱名川續き故なるべし此国にはいまだ
ぬくみも見しらぬや地獄を併世界にて初見し
カナスダより二千四百里此海路を経て七月目
比と覚つくダンツケといふ国此コッペイカツと云
所に舟を留む
此所常留中荷物并に船中間敷仕切

なるも出来上まで
以前地方なりの出崎の様も見せ此所の海
向地スウヒイツケと云国の海岸に対向
しを見れば漁戸多く棲し大船漁十艘ほど
毎年来る所姫の様に見ゆスウヒイツケの船
火なとされるとも見ゆるなりこれは魯西亜の
親族の国のなりあり国内ゆ
庫下二里四方程人居家低もお連まる地

四郎道ヲ街道及寺塔の新もへトルクルカ
ハ替ル事も有き板ヲ以て男女容子も又
同しき板なり但船ハ被ハ小し替りて有ル
も賞ル常国中ハ使ヒ上陸し別ル家
を借ヒて居ル且船中に貯ル前の焙烙ヲ
陸へ何けるヲ見ハ何所なりし哉しられ
て他境へ船を泊め来ル人質をとられ又焙
烙を法し来ル事大法なりとも

此港ハ毎日常国出帆ス其ハ右の荷貨経料
ハ百分の謝礼し出ス せるなり
計所ヲ来ル師ヲ人画師ヲ人京弘せるヲ
太十郎ハ上陸し唐ヲ一見せり（男舟を掛し所ハ皆陸ニ上ル）
（ちうとなり志州ハ伊ヲ岩佐も唐ヲ同変ヲて国事を以ヲ き悦ヒ ルなり）
船ヲ付ヒ居ヒ
魯西亜人ハ舟ヲ陸へ居ヲ出入しるヲ
（按ヲタンツケハ第那（デヲナ）馬児加（ルカ）ヲ其都府ヒコンヒ
カトルヒ此邦府ヒ島ヲ地方ヒ就ヲ事

[illegible]又西コツペガワ「コツベニハーカ」の略語 コツベニハーカハ此
方地の事なり セイフ[illegible]レと云へる海の東の海を
カシトレと云へる海を渡りて雪際亜国の地とす
對岸諸々の地図張子載せ
小蘭彈張子等あり

同廿七日比 コツベガワ出船こうり大洋へ出 此
海中ハ時々 磁多き所ありて船乱れのみ
支配の中ニ有り

八月朔日二日比 アヒゲリとゝふ国の海上を
亜墨利加

夜中海上にて軍船一艘あり 中船と向ひ
て石火矢のうつ事を發せる事きりに
此方よりハ是を撃ち返す石火矢を持も数ふ事
なし 彼方ハ石火を思ひ見へ陸ハ清よ也
なる 侵入レサノツト 舟師ハ命し何船も
ろくの者こ国事を問ふ カベタン 耳樽ヨ
高ヒ 称りれーブル 拡方て声高の事きく事なる 具如
蘭語ルーブルと云 彼方云 ゆとゝいふ事
を以て高くこと中せ ハ彼舟の業や 我中国

へ向て石火矢を打掛しやと彼舟より答
ふこと也向こゲりの軍船より手船を仕ら
の仕出しにて何ぶの用ありてこれ以ら乱れや
と云こと也魯西亜国より日本海海の供に
舟より何の為ありて来る石火矢をうち
掛しやるの神ぶんと青黛の同じ色の船
北ものの北翌朝は暗夜分暗弥(シラミキ)光
為て他国の軍船と云つかくの振色孫
せしいこの山嵐息の乱り為れ入とそ赤の帆を

下ひくまて俺言を部し遊酒者ぶのせ
為て手罪を謝を使節は出く先を
交ぶ人の掛合やや供人兼ヨリ四人
百員しアンゲリ舟へ乗り移り出船
アンゲリの内某北海を船をまとれの
所へ出船を待居ると船中法度人
流し私別も彼舟をアンゲリの船下まで
し趣なり

以一年いのちを一年あと船中人と最終ろ
みハラシ到ースケ 拂 席察 といふ 國と アンゲリ
國と毎度戦ひあり 此地をハラシースケ敗軍
しかるに又事也事原 事も見へきうと軍船を
備へ整る国せし 根子の如き中船夜中過ぎ
せし所ハラシースケ舟より出来ル 湾
てくく出張也しかるに 者を見ゆ 使節ハ彼
都 ロンドン 迄 ちて いくく 丸 ゆ 陸 出 ま る や

と中せし

本船ハ使節の命令ニ アンケリ 國の内 墓
ふ 湾 ゆ 船 を 寄 使節の 帰 ち を 待 ま く
此所大湾 ち て 軍 船 も 金 沢 ち ろ ハラシース
ケ ち 奪 ひ ち し と て 彼 軍 船 も 多 く 家
み 繋 き 置 ち ち
湾の両岸石火矢 影 く 仕 掛 使 節 ち 二 階
の 樽 ち 第 船 も ち ち

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

此所にて新食物等を増し入候 以下舟を付一所ハ何方
てもなく不を増し
くるべし

案ずるにげりは漢人利亜(カンケリア)計方をとるイギ
リスなり鴻図をとるも世界名誉の英国
なり故府を竜動(ロンドン)に置く近来ヲロシヤ国ハ
隆盛なる事を全く国を奪せんと
いまだ好く誓約の事なしとも

仮令ハ某都城を引いく丸抱めに奪ひ去れ
し国の事強て詳也為をい奪せし湾の名前
漂客数年東洋世界図に略条線を熟図せ
ざる又其西南海を図公に海湾の条
線を引き物の一条点ハレサイット部
う全るよりく本舟を出して名岸レサノットを侍所うし
湾ハ図ムルと見ゆ計所より条線を引き
地名ハ「ルムー」と「又ハルムー」と
コルシワル」洲一城地ハ
壮麗なる方湾なり

都府(港)稿仮の世界図 分国名ハ
左右二百壮校

なる物なるべし

求めき

市貨を強て石上らむ其方図のものあハ海路の条
線を引うこれハ長崎帰帆中図船の役人源
客ホよりハ作等市図ハ地図を求め事ハと
いへともこれと亜船しこと海路ハ於然こと
事亜州の海路を記しとして四枚ハ条引
して贈まつ此役編集参考ハ為て義貨
ハ毎しかハ図を換図して別ハ亜図
を模写せし地名等を和解しを条弼の海

路をも併せ写して模写四幅と為せつを条編の
道ハ神ハい彼図宮ハて悉く日並を記ハ其元を
模して呈せつ如ハ原模写ハ別ハ一幅の地
図を作り其海路条弼日暦のをを記せを和
解しこと初を添て上陸事となつ如
計場及細考和解ハ図天基也て考定を如ハ暦図矣
ハ同氏ハ令せ亜考ハ拙といふ
拙計条線ハ暦の記よりを亜ハ源客ホ時記し
ハ事を方のを条ハつ漂客等ハ前ハ事ハ

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

且後然るに暗記なり彼人事柄如何のものい
般中行路日記紀事略記に尤正確と云べき
ものゝ故はアニケリ以下の記聞いこれと對
校して其仮説の下に略記して実説を取
事尤のごとし
付第線日曆アニケリの説に我長崎の説あるまでを記し
半図ベドルブルクよりアニケリ点の日並に欠て略せり点はアニケリ
まての説上に考く亜船の勢略あて内洋ともいべき所なるあるやや
と思ふ所アフラハ易の人考く亜船の説に亦百回亜船の
説略み引線せし所仮説影くあり此点のみ実例
せしものなるべし

長崎奉行より如解書に彼年曆一子八百
三年八月十一日ベドルフルクを京弧点云彼の年月
あて我享和三年癸亥
六月廿四日あるべし
十二日と異へ事実云彼と此と年曆月日
の数も お遠せし事 彩の差へはべき証又
覚く遠あてもの所あるやいつまも右地図形廣が
アニケリまての第線日曆を欠き打也説を先
よ掠記し

アニケリ出帆彼國一ヶ月八百零二年九月廿三日我
寅八月出船ヲ彼ノ記事前ノ日並ヲ推て
ある
永日暦ヲあて試ミるに漂客等暗記の起
同と赤道を去ること以下の起字日並ハ漂
客覚つし所を編ミ番線日記ヲ今考る而
を同と赤を北を見て其實徴をとること也

同廿三日北使岸に付郡の用事ヲ終り趣あて
漕く事京帰本船出帆ス
海路記を案ずるに出帆彼九月廿三日ヲ
我寅ス八月ヲ何ゝ漂客時記ハ
四方北遠ヲ地図海路番線ヲ付ル事
出帆後洋ヲ南ヲ向ふ洋中四方ヲ陸山の見一向
見ること仕し初北同左の方ヲ力二ツケ阿蘭陀ヲ
ヲ使ヲ乃り

九月三日比カナリヤといふ鴻人一艘を泊む

海路紀を按ずるに彼十月九日カナリヤ諸の内

ヘツロ島に着船十四日まで滞船却て数七日

あり十六日小船を見ること彼十月九日

亦八月廿三日なり則滞留い同廿四日より

時日あらず因て六日之

按ずるに亜墨利加大陸は属を西洋の法

図に加那里亜嘗を以て初度命を明人

澤所謂福鴻乾也故に舟を上を滞留して

測量を試るべしと諸員敬意地名を

カナリヤと云へツロは其通漂客は地名を買へ

再び亦島の海路糸線を熟図するカナリヤ及て無を泊る

島の名は可ナリフロ即テ子リハ

ヘツロ鴻は地を前伝俱

ヒロ子は即カナリヤ鴻の内にして和蘭人は路を

初度と云ふ前に此島より西の方東西初度線の中にヘツロ

の名あり後に云ふ後島は此地命の初度と称す

ヲロシヤ人も地命察の制を倣て此鴻を以て初度とす

海上日暦ヲウラハ汲ヒアメリカ汲に係る

九月廿三日 アニケリ 出船 彼 我 八月八日 彼

同廿四日 我 同九日

彼 同廿日　　我 同十日
同 同廿六日　　同 同十三日
同 同廿九日　　同 十四日
同 十月一日　　同 同十六日
同 同廿八日　　同 同十三日
同 同三日　　同 同十四日
同 同二日　　同 同十七日
同 同九日　　同 同廿四日

中略

同 数十方あ〜てカナリヤ着
カナリヤあは　我廿日より

時日まて北風吹日漂船
此島は伊斯把（イスパヒ）保亜（ホア）の頃所なり其後法蘭
も多く付濃仲清まて海悪し島の大サ我九州程
ありと覚申候の中高山見申候所五里程地形
土人ハ保（ホア）麻まて半程引たり同申黒人（クロウ）あ伊悪
色薄く頭ハ殆切り舟の乗計仮乗と云人皆
初渡りしハ此地ハ日本と同し節も寒暖同様
の所あると云ふ　此後仮作
如し

はけ[illegible]いんとも[illegible]の入[illegible]所[illegible]の品[illegible]服[illegible]所[illegible]
の品[illegible]をもて船中へ賣[illegible]事

蒲萄（形大なりはけ影あり 色赤黒紫色）　蒲萄酒

梅ヨカナリア（酒）ウロイこと[illegible]品高し上好の蒲
萄產出[illegible]なり又カナリーセホーケン秋冬
てカナリーヤと云　鳥も此地の名產なり

柚　梨　橙（ダイダイ）　香橙（クノブシンボウ）　林檎　葱

ホウシナのたき物　梅は此ころ年中有之

家鶏　野牛　孔雀　鶴　此外種々產物

船中にて右の法をもて皆々用ひる事無
之買入こと

薪水を船へ惜しみ加ふ舟の人々上陸致候十和
八人上陸せし根子ある賞人

人の屍を箱入[illegible]物を此所にて求め舟
載せ嬉しき物と思ひ人を雇ても乃至蓋を開き
附き[illegible]なく[illegible]見[illegible]今人の死骸なり

按ずるに木乃伊（ミイラ）なるべし詳説あり其

説地を用金三角形なるを見るべし

出帆の前島中より役人を見ゆるあの賓人（羅行）

の族魯西亜人の族と大抵

同じくして形ふ器用を異にす　三角帽（又使者の冠帽かやぶれ仏）を

見送りあり事畢て後碇を引あげて出帆せんと

するに彼方にも其方にて空焼炮を打て

送出帆迄送りの礼をなすべし

右カナリア諸島の事別に詳説す

同十日頃カナリヤ出帆

常前に日数凡七十余日也

出船以後三四日は鴻くの間を雀躍しく陸の

海は一向見つる事なし沖風吹き舟は已に北方

に走る二日より数日沖へ走りて暑は

風静なるに暑強く堪難く雷雨も

あり夜に入りても暑熱甚しき海上なれども其

比世界の真中へ来りしとて船中従所所水を

北之酒却のませうと其所をコクハトルといふ
便（後文）
昔日日本国帆の時も
亦再ひ此所を寄るあり
扨コクハトルは羅甸語にて赤色の事なり
此所アメリカ海の角にて西し海路地と接す
又赤色歩行を色船せし此所彼土月吉
より十五日目の間亦十月朔日より同二日
迄此所を見ゆ
舟師（カピタン）我こゝ行りしとカナリアより南亜墨利加
の海上ハ世界第一北平穏なる所にて即コクハトル
北下を行くを以て年中此所風も穏にて波穏
なる所なり是より一日も吉き風出る者いれ
の所へ出る事ハ思仮北方と云事といふ
きけ色風静なる事ハ却て船快く走る大抵
なるら損破せず
又イワレヒヨータロイチ」と云人行り曰ハコクハトル
の下ハ海の郭なるものゝ世界を測る事も

仕あくしめ代船ゆなりてハ動うゆ所なり地先
うくより見い南へも少へも潮道立なりまた五里
数もなりなり中也あるくい宮より七日も東へ走出
小風吹といふ相風る走るしも有事ゆなりなく
あるいたくの話有
しかるし
北極星七曜をまあ見ゆやうに
北極星より南い一ツ星
なりしまへ高くい強ゆ外驚き強合ひう赤ゆ下
を西うるきて好走方ゆ舟を般ゆうる走目

積ゆて見を尺ゆ何の図の舟なりしゆ国も尚めて
雙方より船の小旗を振合せて呼うる気うう
沖を走る時海水の色変しゆ原不二言なうう
色にゆ似くるくかりなりと云ふもいふしまゆ
掛ゆ見ゆ足しに上へ引けても同文なりとふゆかりや
より南アメリカ点の内の海上ゆと覺ゆ
陸く南アメリカといふ所へ船を泊よして国へ近ゆ
陸ゆ次第ゆ辛抱ゆ暑熱なりなる船中毎水清

十一月十日南アメリカの内北より一カテリナと云
大漢み舟をつゝむ
按み海路記を検するに彼十一月廿九日我寅十
分昌岩に付て海路の目印蒲鉾み写せるに
此所ハ南アメリカ洲中北一ツ北大漢と見ゆ城下に
一カテリナといふよし
按みブラニシリー伯西児の一港名地図に出る
亜詞にも云上みもブラニシリーとブラニシリーの南に
亜細河といふ川の海み注ぐ所ミシトカナリナと云
地を見せしし
再ひ東南を廻国する伯西児のを海
毎に泊めるに依て糸線を引かけ依所を見出い
其大地の岸に近きサンカラリといふ港に一カテリナと覚しい
け誤に如しけを赤道以南廿八度の也に行て和蘭人刻印せる経報
の表みハ廿七度四十分みに非蒲鉾児撰せる真地の書にサンカタ
リナ島ハ伯西児の海名み属して赤道以南廿七度みあるに
既海を海者熟識を信ずやこれを既遊西洲より西方に向て遊の間
あるるかみ海船をみるる彩水に船中の用を弁して後大南
海みに向ふ伯西児の海を出ハ彼に杜瓦に人不願の地多
け地ホルトアリ 彼に杜瓦に の領西と国中漢ハ大の地
とも入海をそなて渤く大船ハ岸に寄ること能ハ事能ハ

は合に小河岸船も流るゝ所〻見申
潮の関ヶアンケリ船二艘外ハ異国船二艘外ハ異国
干濱也ヶ浦国の石火矢を備へ居り地の舟和
長〻して笹の葉なり〻廣い丸木二ツ割みたるものへ
板を打付たる物を長サハ江戸の猪牙舟なり
此所年中暑氣酷敷の地にて冬寒と云る事
きり船中何も日は二三度ヅ水に浴り魯西亜人
ハ何程暑くても肩を露(ハダカ)(アラ)さる事なく水浴
も

事ひとへの物を着ハ毛織類を是皮類
夏用ハ麻ひなを用ひて彩色
古人色黑〻ベドルフルアて見る〻ロボフは黑色
り赤色より少〻薄黑〻男女ともに跣足且髪(ハダカ)も
米股引半を着をカナリヤて見る所人のめし但拳(ケシ)
毛(ケ)弼髪ヲて眼ハ黑〻女子も色黑〻貧風俗の極
根付ヲ下ヒ紙物を付腰より下ハ木綿又麻の織物を
袴の様ヲ仕立ヲ根附る物を是国ヲ事オロシヤ

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

北婦人のごとく男女ともに入浴せん
小児も色黑く丸裸なり男女ともに歯は黑く赤松
脂のごときものを噛むふ彩目を動かして居る様なり
此濱より北里程遠へだたりハ多く程の家居多く
上陸して　家造りハ瓦葺て下を土にて二尺程が
尺ゟ
上ハ立石重ねて重を付け屋根ハ榊の皮を用ひ
榊ハ此所多明なり
寺も所々オロシヤの寺此屋上ゟ高く
文字の物を建て所々寺内ハ見事紀州の様を
尺ゟ我日本の人此様と同し
榊ゟ此寺ホルチユカルより建原而なるし
津走上陸して車ゟ車ゟ米を荷ふ家を見る
家ハ石造り屋根ハ榊此木を二ツ割りして青く遠
くこれを見るを屋のごとし水車ハ一ツ有て三本
確ゟ仕ゟ根ゟ仕ゟ
此國業影爰婦蒔ゟ高ゟ精米ゟ多く他國

（交易をなす自国にては米を食ふ事を禁ぜり蜀黍
を粉にし湯にて糊のごとくにして用ゆ米は多く
用ひず他国にて米を買ひて唐麦我邦の
麦と同じ椀に木地のまはやや
唐黍布船に買入牛豚鶏（カケ）の例なり山樹
木樟脳を足らざる香椽橙柳足らざる余
紅毛の方に大高山あり頂広い中くぼらしまぬし
オロシヤ人も此山を見て甚驚き怪しむ

此国に茶前洋中にて橘をいくつ程宝あり
て後便節の後に上陸し山にて立木を買ひ帆柱
を作る彼地にて暫く此所に滞在
引出し事所を潜にて見しかども
赤き布にて覆ひ定り居る所也彼人（カラスケヤリ）
リトいふ赤布をいふ事也
唐地影し船中に牧羊買入まこう
茲（ナ）菜蕨（タイコン）細く味噌（カフ）煮事なし　蕪菁（フラ）多し　冬瓜

西瓜（スイカ）　番南瓜（カボチヤ）　胡瓜（キウリ）　蒲萄

蜜柑　柚

蜜椒（よりかうラシヤ）　実小なり　本のごく立ちたるなり

胡桃（小なり）　林檎　甘蔗（サトウキビ）　一本大きく而一束ゝ牛の飼料と船中へ多く入る

白沙糖

右の内本実彩くあり上皮厚く剥きて及ぶと殼ごとかぶりて人面のごとき而あるもの内肉他一たびは甘き事　胡桃の如し　忍人（クロボウ）を宮と金さしけて海を渡き事なり舟人は壹ツ宝とす

こゝを買求め食を常に口中添しく暫時暑熱を忘れ所なく問もれく買の食せしも

其名を問ひしに忘れしも前貨思ふ此回

暖地なるハ櫛子（櫛子音名コツコス）なんとも知のしもコツコスといへるさうしやと問けるハ使者を

却ていふ者問て知せり彼人ハ（コツコス）

上唐ものに則其殼を水俗に煙草せり及也

上第せんといふ他日りを及ぶハ昂して櫛子殼

鄭子礼事 茂質別ヨリ詳審礼強後所

生ずる実は侵なるコツコスを多く毎へ会う

藻(スホウ)材 此ちは庵なりと聞く而見

ものもて房をれしなる物 お集りて一叢を成一体

緑色一房より三節角立長サ二寸許り 初めハ緑

色なる肉黄色となるまき肉として一者を重ても

黄なる色ハ肉黄色となるまき肉として一者を重ても

另又熟せ物はなし 房内色白く味甘き事木瓜(カケヒ)

のごとくに子ハ色一叢二三十房ばかり物ハ二三尺程を来り

実のなるまま図のごとく世大概左のごとく

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1

ガラス使用

一絲山に圓し移府すること能の本や
長さ大なること絲のごとくなる
あるべし不絲なるべし

一異木あり赤く卵黄色の形ちなるを
形に洞に在りて長崎は未だ見ず
いかなる性質なるや

一魚に不足し見つ小蝦多し

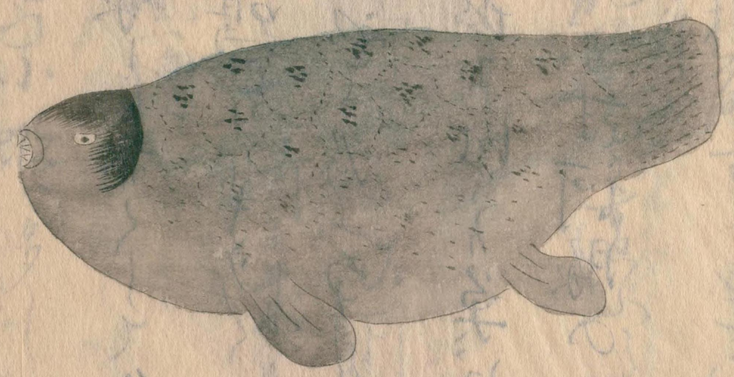
一象に牙ありて猪甚多し牛は同じ

腴脂多し餘し脂丸多しと雖も西亜人
食ずず

一青色にて鼻に喙し赤くして色甚だ
美きなり馬可鳴多きキウくくと人
高く出せば皆ひて吹かるる名なり

一甲の四角にて長さ四寸巽方の如
なるも其名はきかず河豚の肥似り

一猫ハ毛ちりゝ我方ものと同し但し氣強
き粗ちりゝ物ハ別し事なれやう
一尾長猫ハ船中へ買入飼置しに右日ハお
ちゝ
一毛ハ鼠色にて淡白啄（ウス シロク）長く尾毛ハ虎班（トラフ）ち
ゝ人ちゝ毛あき獣ある也所悪臭を
こゝを買て船中子高直ちゝ
ハ内ちゝ足ハ力ちゝ　ちゝ岸の時同所へ



けけらを孫とを足い船中を進艪う

一がんかるぜるといふ物のふうといふ四郷の生きあ

を毎へ指糸せうを解の長サ二四尺皮厚く

色うれ黒く鱗浮きうをう尾は棘ケ折を

口のきを開うなる事七すをう八重歯

生れ同のうつ働く病のをくなるもの

けう郷れい三本けうて長サ一すをうをを

肉の上瘡のをくなる物生長を長い角を

らう山あも海あも牺を人をも丸食ふといふ考を

画も書うは龍を見ぬこを似る格も

覚えを長い龍の子あをとをれをも中金を

赤人船中を酒を漬を殺し白き薬を

けけ其鵬を丸吉を同もぬきを玉を入を

生物のをくあをて貯へうを

梅あ徒書あ云コロコシルは図を掘を用る難

ちをがるかるセルハ コロコシルあ 蕭お近く

且形状も鍾馗お姿写真の写を
本世間に全くこれと同じくしてやはり犬
し所とい差ふとゝ雖ども能て図
を製せる事尤の事
コロコヒル譯説別あり

がんがんぜん圖

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

一は北すてあを買ふ（年イシパシワケ 伊斯把你亜）
の金銀すて交易すす
此不數日滯在諸用穏八出帆の用意をなす
滞在の日数前條詳すす
十二月廿八九日比　エカテリナ出船
拙に海路北へ彼四五千八百四年二月八出帆
と見四ふ我月廿十二月二十七日にあり
滞在今の時北へ大抵今すす北海に七十日し

北方をかぬ南へ向ひ走ること五六日暴風
雪にて場へくくりし所先きへ行き海上深霧
く雲の如き亜墨利加大洲の亜南の出海の海上
と云ふ所なり北を何と云ふ所なり船中北
人手とも北へこりノメスと云ふ所にて玉て
寒氣不堪北出海を乗り出し北へ向ふ又玉
て暖氣なる所へ向ふと語る北より地方北
に至あり山中より火烟立ち北に強き去て出止

葉ヨ如蓮ヲ以テ天地ニ立レリ

以爲地ヲ北山ヨリ吹来ル風ヲ宜シ好ミ為ル

船ヲ置ヲ地ヲ事ヲ計ラレテ次第ニ南方ヘ流

流サレ数日切リ居ル程ニ寒ク覚ヘ

き始メて寒氣も強く船中ハ人々の外ハ心痛の

様子ハ何方ヘ心支ヘ為ル事ヲ知ラレ

く南ヘ流サレハ七十度以上北海上ニ成リ海水

氷ル程船ヲ出ス所ヲ知ラレず

七十度ヲ以テ事ヲ彼ハ同セイムテサ以テ度トシ

ヘ南方ハ北極ヲ同ジ極下ニ近ク

ハかくある事ヲ精命察諸仮の世界ハ

は南極ヲ以ハ氷海界限の図ヲ元初漂流

の為ニ出帆サレバ三ヤウロ五ヲ七ヲ

ヲ為テ氷海ヘ入リしハ北極下ニ近キ七

十度前後ヲ以テ所ヲ見ヘ源内等南

北極ヲ近キ海上ニ極ヲ究メしハ著有

なる事北中の事なるいふ所にまく南亜
墨利加洲の狹長なる樊常沿常みゆ
出るの大洲なり
七十度前後まてい亜船もなれもて亜ちい亜
亜利なるぬやと云は比人のいのしいくの危難仝
方なし彼くい西風とても吹寄ドドブラナデシタ
のうえ船ちなきと念せしや
掠み彼回板の言葉曷ふ亜米利加洲の月

ブデグ デホープ 和蘭名より明人
所譯喜望山峯也 の和名
ていうと亜右大洲の神みして和蘭の領所
なり少へ出るつき再紀みを東へ下る事氣
ふい實ま危難まて是一年と思はれる
彼是と吉原内風吹寄順風ふなりコリノメスト
云を点ち北方へ向て走りなれん既ま時世へ
又漸く暖氣の海上となる亜
海中ま湖水漏ていうるうち見ゆる所と考うる

862
1

ゆ[illegible]と思ふ[illegible]北海上[illegible]
[illegible]

環海異聞巻之十二終

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『環海異聞 16巻』 請求記号 862-1

ガラス使用